

## は し が き

学 長 梶 浦 善 次

昭和62年3月には、工芸美術科 亀山良雄教授、初等教育学科 磯貝芳司教授が規程による退職となる。それで研究紀要第20号は、両氏の退官記念号とすることになった。

亀山教授は、昭和41年工芸美術科創設とともに本学に着任され、再度に亘って長い間科長をつとめられたのであった。坂 担道教授とともに工芸美術科の生みの親でありまた育ての親であった。科長のみでなく学生部長その他多くの重要な学務を分担し、本短大の興隆にきわめて大きな貢献をされたのである。教授は、近年突然難病にかかり、入院加療したのであるが不治なものとして私たちは憂慮したのであった。しかし氏の生命力というか精神力というか、短日時のうちにこれを克服し、今日に至ったのである。奇蹟と表現するほかのことばを知らない。氏は退職とともに一切の外的拘束を離れて、作家として創作に専念するということである。私はあの強い芸術家としての個性を、今後の作品に期待し、感謝をこめてお送りしたい。

磯貝教授は、教育学関係の講義を担当されるとともに、佐々木秀一教授の後をうけて初等教育学科長となった。教授は専門分野はもとより、戦後道指導主事、札幌市指導室長さらに道内における高等学校長として豊かな教育経験の所有者であり、初等教育学科のみならず短大運営にきわめて大きな貢献をされたのである。教授はきわめて豊かな着想力を持ち、その判断も敏速適確であるとともに行動力の人でもある。私はいつも氏の多才と行動力に敬意をもってきた。一おうの退職となるのであるが、さらに引きつづき講義をもっていただけなのであり、また理事としても学園を通じて大きな働きを期待することができる。昨秋教育功勞によって勲四等旭日小綬章を授与され、功成り名を遂げたともいわれるが、氏の活動力は今後にまつべきものがある。氏が短大に着任されてすでに10年を経過した時の速さに驚くとともに、今後一そうのご発展を期待して、一おうの送別のことばとするのである。

最後に、本短大では以前より退職される有力な教授について退官記念号と銘打った編集をしていたが、これは研究紀要編集委員が早く気づいて、ご本人の了解をえて実施されていたのが実情である。本年度委員会は、その手続きや基準などを明確に内規として定め、年度によって遺漏の生じないようにした。このことについて心から謝意を表するものである。